

学生は教養科目としての臨床心理学に何を望んでいるか？

菊 島 勝 也 (愛知教育大学学校教育講座)

What do the students want to study Clinical Psychology in the Liberal Arts?

Katsuya KIKUSHIMA (Department of School Education, Aichi University of Education)

要約 臨床心理学関連の共通科目を受講した学生に対して、1. 授業を選択した理由、2. 授業の中で臨床心理学のどんなことを学びたいか、3. この授業を受けてみて、興味深い、面白いと感じたテーマは何か、について自由記述により回答させ、結果を分析した。履修学生の要望をみていくと、「自己の心理を理解するために臨床心理学を役立てたい」という要望と、「他者の心理を理解するために臨床心理学を役立てたい」という願望の二つが存在していることがわかった。そしてそれらは極端な場合、ファンタジックな願望としてエスカレートしがちであり、専攻ではない学生に対して、興味・関心を満たしつつ、正確な理解ができるように授業を組み立てていく必要性が認められた。その点で、授業の形式としては、自分自身を題材に考える事ができるような、実際の作業を取り入れて行くことが求められた。

Keywords : 教養科目, 臨床心理学, 教育

問題と目的

心理学、特に臨床心理学は何かと社会的な注目や関心を集めやすい学問であると言える。心理学を専門的に知らない人と会話をしていると、一般的なイメージとして、心理学と言えばそれは臨床心理学を指している場合も少なくない。そして、そのような注目や関心を集めているわりには、臨床心理学について正確な理解が社会的に得られているかという点、そうではない状況にある。

大学に入学してくる学生をみても、臨床心理学への興味と同時に、大きな勘違いや思い込みを持つ者も見受けられる。これは、心理学は高校までの教科に無いことが挙げられる。さらに、マスメディアでは盛んに「心理学風」の言説、例えば血液型性格占いや、映画や小説における犯罪者への「心理学風」の分析などが飛び交っているというような「心理言説の勢力拡大」(Gargen,1994)とすべき事態も、関連していることが推察される。

そのような状況において、大学において様々な専門の学生に対して、正確な臨床心理学を学習できる初めてのチャンスとして、臨床心理学関連の教養科目が存在していると考えられる。このような視点から、臨床心理学関連の教養科目の内容をどのように設定し、どのように教えるかということは非常に重要であり、今後とも検討していかなければならないテーマと思われる。

そこで本論文は、教養科目として学生が臨床心理学でどのようなことを学習したいと考えているのか、また実際に授業を受けてみてどのように感じているかについて、明らかにすることを目的とする。

方 法

対象 2年生対象の臨床心理学関連の共通科目を受講した学生44名。

方法 授業時間内に自由記述式の質問紙に解答してもらった。

質問紙 以下の3つの問について、自由記述で回答する。

1. あなたが共通科目としてこの授業を選んだ理由は何ですか？
2. この授業の受講を決めた時、共通科目の中で臨床心理学のどんなことを学びたいと望んでいましたか？
3. この授業を受けてみて、興味深い、面白いと感じたテーマを挙げてください。

結 果

自由記述データについては、KJ法を用いて、以下のように整理分類を行った。なお、本授業は臨床心理学が専門の教員3名によって担当されているが、今回は筆者の担当した部分のデータに限って、分析を行った。

< 1. あなたが共通科目としてこの授業を選んだ理由は何ですか？ >

心理学専攻者であり心理学に興味があるので
なんとなく興味あった(非専攻学生)

自分にとって今まで未知の領域だったので

将来教員になった時に、心理学を勉強しておけば役に立つと思った

心理テストに興味があった

カウンセリングに興味があった

自分を見つめるために
こころとからだの関係に興味があったので
他者の気持ちをわかるようになりたいので
友人と話してノリで選んだ
他にパツとしたものがなく、消去法で

＜2. この授業の受講を決めた時、共通科目の中で臨床心理学のどんなことを学びたいと望んでいましたか？＞

他者の心を理解する方法（しぐさ、行動、字、絵画などから）
自分自身の心を理解するための知識・方法
心理テスト
一般人でも使える心理学的技術
セルフケアの方法
（自分が）他者の心をケアする方法
心理療法
臨床心理学が実際のこころの援助にどのように活かされているか
子どもの心理と援助方法
ストレスがこころとからだに及ぼす影響
性格
犯罪者の心理
恋愛の心理
脳の構造とはたらき
心理学の基礎、理論

＜3. この授業を受けてみて、興味深い、面白いと感じたテーマを挙げてください＞

芸術療法（コラージュ療法）の実施
ストレス尺度の実施
コーピング尺度の実施
ストレス解消法
教員の臨床心理学的実践経験
授業内のディスカッション
興味無し

考 察

設問1について

まず、「1. あなたが共通科目としてこの授業を選んだ理由は何ですか？」という設問への回答を、回答者数の多かったものを中心にみていく。この問いへの回答として最も多かったのは、非専攻学生による「なんとなく興味あった」（19名）というものである。この回答には、加えて「（自分にとって）未知の領域であるし」とか「今まで心理学に触れる機会が無かったので」という記述もみられ、回答者は心理学についてほとんど何も知らないが、なんとなく興味を持っている状態であると考えられる。

次に多かったのが「将来教員になった時に、心理学

を勉強しておけば役に立つと思った」（6名）という回答で、これは先ほどの回答に比べれば、現実的な要望と言える。

次の「自分を見つめるために」（6名）という回答から、自分自身の内省的探求の方法として心理学に期待していることが考えられる。

設問2について

「2. この授業の受講を決めた時、共通科目の中で臨床心理学のどんなことを学びたいと望んでいましたか？」への回答であるが、最も多かったのが「他者の心を理解する方法（しぐさ、行動、字、絵画などから）」（11名）である。この回答で興味深いのは、しぐさやふるまい、書かれた字や絵画から、他者の心理状態を理解したいと回答者が求めていることである。他の回答でも「一般人でも使える心理学的技術」を学びたいというものがあり、これも同様の考えであると言える。もちろん、人間が他者の心を理解したいと考えるのは、自然なことである。しかし、言語的コミュニケーション以外のところで、何か特別なサインから他者の心理を推定できる技術を身につけたいという要求は、やや魔術的でファンタジックな思考であり、心理学に対する過大な要求であると思われる。それだけに、青年期という時期を考えると、学生の他者とのコミュニケーションにとまどい悩む姿がうかがわれる。

「自分自身の心を理解するための知識・方法」（10名）は、設問1の回答「自分を見つめるために」と対応したものである。これは先述したように、自分自身の内省的探求の方法という役割を心理学に期待しているものと言える。他にも「心理テスト」、「ストレスがこころとからだに及ぼす影響」、「性格」といったことを学びたいと考えるのも、自分自身の心を理解したいと考えることに関連しているのではないだろうか。このような青年期における自我同一性の形成と関わる課題について、心理学が役立つのではないかという期待感を学生達が持っていることがうかがわれる。

次は、「（自分が）他者の心をケアする方法（4名）」であり、さらに「心理療法」（3名）、「臨床心理学が実際のこころの援助にどのように活かされているか」について学びたいという回答も同様の要求であると思われる。また、自分に対する心理的支援となる「セルフケア」について学びたいという回答もあった。臨床心理学では、人間の心理を理解し、それを支援に活かすということが重要な役割となっており、その意味で、先述の自分と他者の心を理解する上で心理学を役立てたい、その上で、自分と他者に対して心理的支援に心理学を活かしたいという要求が、教養科目においても学生から求められていることが明らかとなった。

この他、「犯罪者の心理」、「恋愛の心理」といった

いわゆる通俗的な心理学のイメージも見受けられた。一方で、「脳の構造とはたらき」、「心理学の基礎・理論」といった、心理学を学問的に基礎から学びたいというような要求も存在しており、前述のような実践的・応用的な要求とともに、授業内容をどのようにバランスをとっていくかが課題であると考えられる。

設問3の回答について

「3. この授業を受けてみて、興味深い、面白いと感じたテーマを挙げてください」への回答としては、「芸術療法（コラージュ療法）の実施」（14名）を挙げる学生がもっとも多かった。これは芸術療法の一技法であるコラージュ療法を実際に授業中に実施したものであるが、学生達は非常に楽しんで取り組んでいた。ただ、学生達が完成した作品を筆者にみせて「コラージュから性格を判断してくれ」と言われ、説明に窮した。なるべくわかりやすいように、芸術療法について説明し、コラージュはいわゆる通俗的な心理テストと呼ばれるものではないことを伝えたが、専門ではない学生に短い時間でどこまで理解してもらえたかは不明であった。

「コーピング尺度の実施」（12名）は、ストレスに対するコーピング（対処）を測定する尺度を各自実施してもらい、結果の解釈を各自行ってもらったものである。ストレス過程のもう一つの要因である「ストレス尺度の実施」（8名）もそうであるが、コラージュと対称的に、結果が数値化されて表される心理尺度は、学生には理解しやすかったようである。これに「ストレス解消法」（7名）とこたえた学生も含め、回答ではコーピング尺度を自分でやってみることで「自己分析ができた」「自分にあてはまっており、結果に納得した」「今まで見えていなかった部分が見えてきた」との感想が述べられていた。

最後に気になった回答として「興味無し」という回答が1名いた。この回答者は理由を書いてくれていて、「人の心の深みを読み解く方法を知りたかった」がそれを得られなかったためとのことであった。このような、人間の心の深みを読み解いてみたいという願望は、筆者にも十分共感するものであるし、「そのような方法がいまだ確立されているわけでもない」し、「たった一つの授業を受講することで得られるものでもない」ことも含めて、学生と議論してみたいところであった。しかし、現実の授業の枠組みの中では制限もあり、そのような学生の疑問や関心をうまく学問的関心につなげていくことが、これからの課題であると考えられる。

まとめ

以上から、授業を選択した理由としては、非専攻学生では「なんとなく」の興味で選択されていることが

多いことがわかった。しかし、履修学生の要望をみていくと、大きく分ければ「自己の心理を理解するために臨床心理学を役立てたい」という要望と、「他者の心理を理解するために臨床心理学を役立てたい」という願望の二つが存在していることがわかった。そしてそれらは、ともすると「日常的には見えていない深層的な心理を、何か特別な心理学的技術を用いて明らかにできるのではないか」というファンタジックな願望にエスカレートしがちであり、専攻ではない学生に対して、興味・関心を満たしつつ、正確な理解ができるように授業を組み立てていく必要性が認められた。その点で、授業の形式としては、自分自身を題材に考える事ができるような、実際の作業を取り入れて行くことが求められる。題材としては、コラージュのような芸術的な表現手法も有効であるし、心理尺度のように数値化された結果の出るものも、学生には理解しやすいことがわかった。

文献

Gergen, K.J. 1994 Realities and Relationships Soundings in social construction. President and Fellows of Harvard College. (永田素彦・深尾誠訳 2004 社会構成主義の理論と実践 関係性が現実をつくる ナカニシヤ出版)